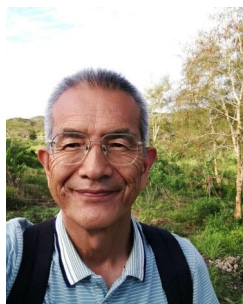


南太平洋の小さな島：フィジーからの便り #6

2024年5月派遣 天野久雄（シニア）
第6号 10月15日



こんにちは。フィジーで活動している天野です。フィジーは南半球にあります。今は冬です。そうはいても私がいるラウトカは、10月の平均気温が25°Cです。最低気温は22°C、最高気温は30°Cです。ちなみに夏の12月から3月の間も、最高気温は31°Cであり変わりません。日本の春や秋のような気温で、とても過ごしやすいです。

今回の号では前回に続き、模擬授業を詳しくお伝えします。日本の大学の教育学部の学生さんや先生たちにも参考になるとと思います。

※ 学生たちの写真は掲載できないので、説明文から授業をイメージしてください。

マイクロティーチングの目的と内容

大学では、教育学部の学生が実際の授業を模擬的に行うトレーニングを「マイクロティーチング」と呼びます。学生は少人数のグループに分かれ、それぞれのグループで異なる授業を担当します。先生役の学生は、生徒役の学生からなるクラスに対して授業をします。授業後には、指導教員だけでなく、他の学生たちからも評価やコメントを受けます。受け取る評価シートには、学生一人ひとりに対して、複数の評価項目に基づいた5段階評価の点数やコメントが書かれています。

評価は厳格に行われ、私も実際に評価シートを記入する経験をしました。7項目の評価と英語でのコメント記入は、短時間で複数の学生に対して行うには負担が大きく、私は学生一人あたり3つのコメントに留めました。

今回のマイクロティーチングでは、学生たちは、時刻、数列、統計グラフ、角度など、小学校で学習する数学の中からテーマを選び、授業を行いました。これらはフィジーの小学校の4年生から8年生までの内容です。

私はリハーサルで、視覚的な教材やアクティブラーニングを教えました。例えば、角度の種類を教える授業では、直角や鋭角、鈍角などを両手や2本のペンを使って表現させる方法。クイズやミニゲームを取り入れること。このような提案をしました。

学生たちは、私のアドバイスを参考に、授業に様々な工夫を取り入れていました。特に、私のカウンターパートのクラスでは、学生たちの成長が著しく、他のクラスとの間に大きな差が見られました。これは、私のカウンターパートが高い指導力を持っていることが大きな要因と考えられます。

その一方で、フィジーの学校ならではの特徴も見られました。これは日本の大学生や、算数や数学を教えている先生たちに参考になると思います。ここでは、それらのうちのいくつかを紹介します。

1) 授業の始まりと終わり

授業の始まりと終わりに、先生は生活に関する短い会話で、教室の雰囲気をやかにします。日本では本題に直接入るケースが多いですが、フィジーでは、今日の掃除の様子や来客の知らせなど、様々な話題で生徒と交流します。「今日は金曜日なので、週末を楽しんでね」といった、期待感を高めるような言葉もよく聞かれます。その一方で、ラウトカでは天候が安定しているため、天気の話はほとんどありません。

2) クイズやミニゲーム

授業ではクイズやミニゲーム、歌を取り入れることも多く、それらが生徒の学習意欲を高めています。フィジーでは、先生が替え歌を作って一緒に歌うこともあります。私が見たクラスのマイクロティーチングでは、角度の種類を教える授業で、学生たちが西城秀樹のヒット曲、「YOUNG MAN」の替え歌を歌っていました。面白いなあと思いました。Y,M,C,Aの代わりに、A,R,O,Sと言って両手でポーズをとりながら踊るのです。これは英語で鋭角、直角、鈍角、平角を表します。このように、クイズやミニゲーム、歌は楽しく覚えられるツールとして活用されています。日本の学校では、勉強に対して真面目さが足りないと批判されますが。。

3) 生徒の反応を確かめる

フィジーでは先生は説明の後に、「right?」や「Is that clear?」などと言って、生徒が理解できているか確認します。大学の講義や説明の最後にも、「Any questions?」と質問を促すのが一般的です。日本では「わかりました」と答えるのが普通ですが、海外では違います。そして質問やディスカッションが好きな人がいます。それに対して発表者は丁寧に答えなければなりません。私がプレゼンしたときも難しい質問をした人がいます。ちょっと困りました。

4) 先生と生徒の距離感

海外の学校では、先生が説明した後は自分の席に座っているのが一般的です。質問がある生徒は先生の所に行って聞きます。これが一般的な授業スタイルです。そこで私は日本式の、生徒の間を巡回して質問に答える方法を紹介しました。大学生たちはそのような授業を受けた経験が無いので、説明の声が大きすぎるとか、説明しすぎて答えまで言うという初歩的な失敗をしました。でも距離感を縮めると生徒が質問しやすく、教育効果が高まることを知ったようです。

5) 授業のまとめ

授業の最後に「分かりましたか」ではなく「何がわかりましたか」と質問します。そして生徒に学んだことを発表させます。生徒は新しく知った単語やそれらの意味を説明します。これはアクティブラーニングの基本スタイルです。大学の講義でも、多くの講師が最後に同じ質問をします。